



俳句雑誌[おき]

4月号

沖 発行所

緩流

能村 研三

巨大震災

春北風帽子嫌ひを通しけり
バレンティン対面式の厨かな
わが路地の衛星画像蟻出づる
登四郎の水脈滾ちうらけし

三月十一日におこった東北の大地震は日が経つにつれ、その被害の甚大さが明らかになってきている。今回の地震の時、私は編集部旅行で北海道にいた。地震が起きた時間には網走から砕氷船に乗って海上にいたので、地震の揺れを全く感じることは無かったが、船上で、家にいる娘からのメールで大きな地震が起ったことを知った。その後、層雲峡へ向かうバスの中で東京と連絡がついた人の話を聞くと、津波で街が呑み込まれたり、市原で燃料タンクが爆発したという情報が入ってきた。層雲峡のホテルのテレビで全容が判るにつれ旅の気分は一気にすっ飛んでしまい、暗い気持ちになってしまった。どうも我が家の千葉の方も相当の震度だったそうで、家族の安否と仕事の職場の様子を知りたく携帯やメールをしてみたが、全く絡がらなくなってしまった。次の日に札幌から飛行機で帰ることにしていたが、果たして飛行機が飛んでくれるのかも判らず不安が次第に増幅されてきた。結局は夜中に公衆電話から連絡ができ、我が家の無事が判った。職場の方も夜は小ホールを開放し東京

川 霞 今 緩 流 の ひ と と こ ろ

編集部の旅行、積雪で札幌に降りられず

春 陰 や 上 空 旋 回 待 機 中

春 愁 の リ タ ー ン 飛 行 の 機 中 か な

北海道での震災報

旅 途 次 の 震 災 報 や 春 の 闇

旅 先 の 連 絡 難 民 雪 解 野 に

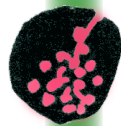
春 禽 散 ら し 海 吼 幾 重 迫 り 来 る

からの帰宅難民五百人の引き受けをしたとの報告を受けた。翌日の夜予定の時間に帰宅することが出来たが、家に帰ってみると、大きな損傷等は無かったが書斎の本が床に多数散乱して相当の震度であったことが判った。

沖関係でも、支部窓口の吉田政江さんが被害があつた県の人たちに連絡をとって下さり、皆元気でいてくれたことが判り安堵した。しかし地震直後に送られた同人の方々の投句はがきから、市川の隣の浦安では液化現象がおこり町中に大量の泥が噴出したり、銚子では津波からの避難で高台に逃げられたことを知った。

地震以後は、計画停電もあつて三月中の句会や、俳句結社の祝賀会もすべて中止となり、職場の財団の文化事業もすべて中止および延期をすることとなった。町に出ても人の往来も少なく、ガソリンスタンドやコンビニへの長蛇の列など人々の閉塞感だけが広がって元気がなくなっているようだ。大被害に遭われた方々には心よりお見舞いを申し上げ一日も早い復興をお祈りする。そして、せめて俳句を作る人からこの閉塞感を打ち破り元気にしていきたいと思うのである。

蒼茫集



傷もてるもの

淵上千津

平均寿命即米寿てふ豆を撒く
雌伏とも山椒に寒の芽寒の棘
傷もてるものの優しさ雪解風
雨温き夜は夭折のまぼろし来
悔ありて春夜の雨を聴き飽かず
軽く往なせと春禽の鳴き交す

雨をとこ

千田敬

悼・松本圭子宛
寒九の水携へてはや師の許へ
寒明けて老人力も見せ頃か
ひと粒を十と数へて年の豆
モナリザの目差し追へば春立ちぬ
紙縫よる指の湿りも雨水かな
梅東風や列の後尾に雨をとこ

金属音

久染康子

探梅行野鳥の会に追ひ越さる
寒林を来し耳奥に金属音
燃えさしの焚火を無断借用す
牡丹雪怒りを吸うてくれにけり
蜃気楼地球をすこしはみ出せり
「鬼は外」そんならわたし家出せな

私事

安居正浩

熱燭やぼろり私事です
春の雪風呂の煙突残る町
声で押す積木の電車あたたかし
下萌に横座りする人とある
尼寺に人の声ある梅の花
風花の溶けて夕暮灰かなり

春立つや

北川英子

朝日ざしほのと霧立つ敷松葉
凍瀧やこの凍てきれぬ声しぼり
寒月光ひとと湖面に沁みついて
処分てふ万の鶏の死寒明くる
春立つや米寿の十年パスポート
いくらかの春愁も連れ旅靴

すると

千田百里

笹鳴やもう俳部屋を出でよとて
雪原に灯の洩れ倉本聰の塾
三寒の四温を待たで逝きし君
春愁や手動のドアに塞かれゐて
するすると大涅槃図のせり上る
雛ともし青黛の眉匂ふかに

終の地

藤原照子

雪嶺にわかれ雪嶺高速度
歌舞伎座の更地や月の冴えまさり

紙鍋の豆腐を掬ひ春隣
冬帝へ箒逆さにでもせむか
冴返り自らに振る浄め塩
終の地の三の佐倉や凧揚がる

天元

上谷昌憲

寒晴や臨海のビル総立ちに
群集のやがて一人となる寒暮
活けられて水仙の影寄り添へり
切岸のすたと日落つ冬すすき
下町やかりそめに積む屋根の雪
天元に打たれし一手冴返る

産声

大畑善昭

寺の木に來し隼の長くぬず
姿見の奥も山並み雪眩し
雪竿の辺へ突つ込みし轍あり
雪搔きの爪の先まで疲れゐる
白雲のあるだけ浮び菜の花忌
産院にあがる産声深雪晴

さらし独活

細川洋子

若布煮て即かず離れず家族たり
背筋まづ伸ばす体操下萌ゆる
大寒のところに柁目あるごとし
さらし独活とんと時流に乗れずをり
梅ふふむ酵母のやうに梅ふふむ
先師愛用の品を見て
落款の遺愛の十二春の星

梟のうた

辻美奈子

シリウスを覚えて吾子は十代へ
眠れない子と梟のうた聴かむ
春や渦なす星雲も遺伝子も
子を抱くに足らぬ双腕春櫛
ナンデムンシジャン
南大門市場春服の極彩色
生み落とされて春月のみづみづし

消ゆる昏さ

宮内とし子

春の雪消ゆる昏さのありにけり
行く道は帰る道なり野水仙
吊鮫鰈海に向きたる腹白し
余寒なほくろぐろと浮く潜水艦

浅春の相手に合はす白ワイン
小流れの稚魚きらきらと草青む

裸木

遠藤真砂明

裸木の一切妥協なき構へ
月青く冴えて男の計報あり
蛸壺を数へてゐる子日脚伸ぶ
また一人来て合格の背をどやす
風糸を伸ばし切つたる岬日和
神・松本清人
晴れ切つてもう三七日の梅日和

春の雪

菅谷たけし

雨以後の空のみづいろ春めけり
冬至梅自愛の睡りもう一日
実南天神・松本清人晩成といふ佳き語かな
霜柱踏めばうしろに君のこゑ
厚着して生者の側のパイプ椅子
金銀の弔花へ舞へる春の雪

しなやかな起伏

田所節子

備長炭かーんと割れて寒波晴
水仙郷てふ日だまりを崖囲ひ
餅花や母の歩みを目で支へ

廻し戻して春愁のドアの鍵
水仙郷てふしなやかな起伏ゆく
あたふたとしたる独楽より倒れけり

余 光 秋葉雅治

たたなはる北信五岳ふぶき止む
地境の曖昧の辺も豆を撒く
酒樽の箔の真さをに寒明くる
龍天に登り余光の税還付
義理といふ苦みもバレンタインの日
あめつちのあひの繚乱つるし難

水 走 り 松井志津子

るるるぐぐぐ混みて鴨語と白鳥語
明日あたり帰るか鴨の水走り
指揮者気分春の鷗の百が向く
諍ふも睦むも嘴や春かもめ
茎立てり婆のすさびの磯畑も
それとなき別れの言葉春の雪

藍 深 め 荒井千佐代

大寒や瘤りゆうりゆうと神の樟

日に三度洗ふ飯碗ヒヤシンス
避寒して生簀の魚を見てをりぬ
子のために押す実印や桃咲きて
父の忌近し春潮の藍深め
引込線たどれば海や春満月

受 験 子 森岡正作

荒くれてゐる赤松も春隣
煮凝りの山河の如き鯛の骨
何笑ひしか待春の巫女だまり
受験子にこの青空の深すぎる
山笑ふ西に憤怒の山を置き
箒目の流れに乘れり落椿

奥 能 登 杉本光祥

奥能登や雪積む音のセピア色
手秤であれこれ選ぶ松葉蟹
輝の手をもて蟹を包み呉る
日矢射すや小千谷縮の雪晒し
足裏に重力感ず霜柱
スマートフォンなぞりて春を開きけり

潮鳴集



家業継ぐ

富川明子

如月の風のまつすぐ家業継ぐ
待春やゆきひら鍋の卵とち
豆打たな先づ胸裡の天邪鬼
ローラースケート春風のジグザグに
雪積むやふつと聴力への不安

鍵

箱

諸岡和子

寒林に機体の透けて駐屯地
野鳥の会ずらりとダウンコートかな
橇遊び終は一番星乗せて
配達の路地に手橇の灯油売
寒戻る鍵箱にまた鍵かけて

胴震ひ

柴田近江

雪女郎結ひし神籤か濡れてをり
柊挿す鶏舎豚舎の傾ぐ軒
日脚伸ぶ百度参りの数へ札
雪吊解く一瞬空の胴震ひ
日の斑食み春食む鯉の水輪かな

風音

林昭太郎

甘栗の袋が真つ赤山に雪
あやとりの十指と十指春を待つ
冬日濃し鍼灸院の人体図
風音のなかの水音探梅行
多喜二忌や火葉繋がる燐寸棒

沖作品



亀吉と名を申しけり冬眠す
洗はれてにほひあらたに冬林檎
寒鯉のしづかなれども力満つ
ブルドッグてふ春愁の顔ありぬ
ギアチェンジして陽炎を追ひ越しぬ
雪女め組の中に紛れをり
背中より少し充電日向ぼこ
凍滝や内に蒼き炎抱きしまま
今日よりも明日がいいはず冬木の芽
三寒の家出で四温の銀座かな
飛行機雲は竜を描けり大旦
雪ですよ窓辺によせる車椅子
どの貌も懸命に生き乾び鮭
軒氷柱よべの風向き印しけり
カーテンコールめく白鳥の着水す

岐阜

花田 心作

市川

七田 文子

千葉

清水佑実子

能村研三選

十二月空に星なく街に星
波音に風音重ね枯岬
べらばうめこれ持つてけと年の市
一幕の下りて咳声広がりぬ
枯薦の中に灯ともす喫茶店
漢にもある富士額初鏡
この年も一番客は初雀
来し方の余白語らふ日向ぼこ
着膨れていまさら愛の言葉など
煮凝や昔の祖母はよく叱り
寒夕焼橋あまたある隅田川
黒々と老杉の洞牡丹雪
雪女郎月に遠出をして来しか
くねくねの頸を伸ばして鳥帰る
断崖の真下に傾ぐなまこ舟

東京

能美昌二郎

長崎

岩永充三

岩手

浅沼 久男

沖作品 15句選評

*

能村研三

洗はれてにほひあらたに冬林檎 花田 心作

「冬林檎」という種類があるわけではなく、林檎は秋の季語であるから、冬まで保存された林檎ということになる。冬になれば常温で長期保存が出来、まして新聞紙などで包み、段ボール箱などに入れて、涼しいところで保存すればさらなる効果があるそうだ。しかし、外気も冷たくなった頃に部屋を暖かくして食べる林檎の味も格別である。ここで詠まれた林檎は、秋から保存された林檎であるから決して新鮮なものではないが、冬の冷たい水で洗うと林檎の真つ赤な皮は見事に輝き甘い匂が漂ってきた。

雪 女め組の中に紛れをり 七田 文子

江戸の町火消をいろは四十七組に分けた中の一組で、「め組」が有名になったのは、江戸時代の文化二年に起きた「め組の喧嘩」当時、境内で行われていた相撲の取り組みに出場していた

力士と、地元の火消し「め組」の消防士たちが、ささいなことから大喧嘩になったこの事件は、江戸っ子の間で語り継がれ、後の歌舞伎の演目にも取り入れられるようになった。雪女は当然空想上のものであるが、「め組」のメンバーの一人であったとする想像力は諧謔があって面白い。

雪ですよ窓辺によせる車椅子 清水佑美子

作者は病院に勤務する看護師であるから、日常の仕事の一断面が描かれた句である。住まわれている千葉県は北国とは違って雪が降ること稀で、窓辺から見える雪に被われた風景はだれもが美しく感じる。患者さんを車椅子に乗せてこの美しい雪景色を見せてあげた。作者の心やさしい動きが目に見えてくる。

波 音 に 風 音 重 ね 枯 岬 能美昌二郎

蕭条とした枯岬に一人たたずんでいると、透明な潮風の音と青い海の波音に包まれる。少し離れたところで、パラグライダーの練習をしている人がある。潮風が一瞬にパラグライダーを広げて空に持ち上げる。けれども、音は潮風と波音しか聞えない。

漢にもある富士額初鏡 岩永 充三

富士額（ふじびたい）とは、額の髪を生えきわが富士山の形に似たもので、美人の形容とされている。近年は男性も中性化の傾向があり、男性でも富士額の顔つきの人もいてやや女性的な心を持っているようにも思えた。「富士額」という言葉と初鏡の幹旋力面白い。

雪女郎月に遠出をして来しか 浅沼 久男

山形県に伝わる民話には、雪女郎は元は月世界の姫であり、退屈な生活から抜け出すために雪と共に地上に降りてきたが、月へ帰れなくなったため、雪の降る月夜に現れるとされる話がある。この句もその話を踏まえての句なのかわからないが、東北に住む作者ならではの句である。実際に存在しない雪女郎であるが、雪が降りやんだ月夜の晩には、余りの美しさからこのような逸話も想像させるのだろう。

(以下略)